

串 田 孫 一
山 羊 の 鈴
竹 内 書 店

串田孫一：

大正4(1915)年11月12日生。晩星小・中学校，東京高校，東大文学部哲学科卒。現在東京外国語大学教授。

主な著書：『串田孫一随想集』全8巻（筑摩書房），『花火の見た家』（創文社），『霧と星の歌』（朋文堂），『私は街を歩いた』（実業之日本社）他

山羊の鈴

定価 480 円

1962年12月20日 第1刷発行©

著 者 串 田 孫 一

発行者 竹 内 博

発行所 株式会社 竹内書店 東京都港区芝南佐久間町1-50
電話 (501) 3680, 3681
振替口座 東京 90146

印刷・精興社 製本・三水舎

落丁乱丁本はおとりかえいたします

目

次

暖炉のかたわらに	1
土曜日の雪	7
冬の雨	12
腕時計の死	17
春を淋しがる人	22
発車前	28
雨上りの傘	33
地震	38
怪談山行	43
赤いベルト	48
娘と父	53

峠の秋の歌	58
写真	64
古い詩集	70
春の雨	89
空白の日	93
五月の街の夜	104
買物	108
もろうもの	115
白い船	119
五月の森と草原の歌	125
スタイル・ブック	138

炎天	仮装	噂	豚の貯金箱	電話	夜の電車	埃	富士山の虚像	武蔵野の秋	丘の藪	山の湖
187	182	177	173	166	162	159	154	152	148	144

後記	羊飼の時計	雪割草	葛	雲	盲腸炎	A B C Dと私	子供の弁当	作業服	老眼鏡	立札
233	229	225	221	212	207	202	200	197	195	191

暖炉のかたわらに

いいですよ、大丈夫です。そう言ってお客さんは玄関先で挨拶をして帰ろうとするけれど、水たまりの多いまっ暗い道をそのまま帰すこともできず、私は当然のこととして懷中電灯をつけて送る。角まで、その次の角のもう少し道らしい道に出るまで時には二十分ほど歩いて電車の駅まで送ることになる。なるほどこれは灯がないと無理だとお客さんもすっかり感心してしまうような道である。しかし私は自分の家の玄関に立って送り出すよりも、夜がいい加減遅い時にはこうして灯を持って途中まで送るのが好きである。たとえ何々の池と名前をつけたくなるような水たまりがない道だとしても。そうして戻って来た時の、本を読み終ったような薄い空虚の中で私は紅茶茶碗や皿を片付けて、いつもの自分の周囲へ戻そうとする。

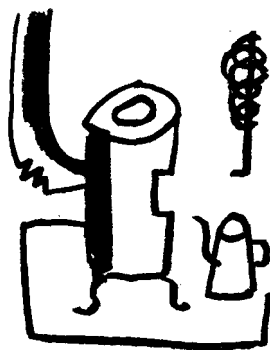
以前、私の仕事部屋は、お客さんと話をする部屋でもあって、それがかえって都合のいいこともあったが、子供たちの友だちもさかんに訪ねて来るようになった今は、仕事部屋は別にして、

一緒では向うもこっちも工合のわるいお客さんがちあうようなことでもない限り、まず自分の仕事部屋へ人を入れることはない。戸を閉めれば、家族の声はさかに聞こえても、一応ひとりになれる部屋を持っている。今だって、昨夜から泊まっている子供の友だちとみんなはトランプをやって賑かだが、その声を聞きながら私は隣の自分のところで、何事にも苛々せずに仕事をしている。

ところがふと以前の家のことを想い出して、自分のこの部屋に誰か私だけの友だちとして訪ねて来るような人はいないかと考えることがある。昔からの私の友だちは、けっして仲たがいなどはしなくとも、遠くなり、都心から離れた私のところへぶらりと訪ねてくれる者も、すっかりいなくなった。みんなそれぞれ忙しいからなどというけれど、そんなことは絶対にない。こっちがそういうことをしなくなってしまったせいである。

家族一緒に話をし、レコードを聴くようなお客さんも、もちろん私は嬉しい。それが自然であればこれに越したことはない。しかし何人かの人間に共通の話題は、たとえ範囲は広くとも、笑い話になり、笑いがあることがまず大切な条件である。

私は笑わない話をたまにはしたくなったという意味で、こんなことを書いたのではない。自分にもよくは分らないもう少し複雑な、ひとりにしておけばどこまでひねくれていくか分らない自



分の氣持を、何かはっとさせるものにぶつけてみたくなつたのだろうか。

それというのも、私の部屋にもう四年目になるストーブをとりつけ、煙突を、軒に打った釘に針金で、ぎぎぎとしぱり、この冬最初の火を入れて、椅子をその傍らへ引き寄せて腰かけると、この同じストーブを囲んで、何の用も持って来たのでない友だちが、向う側の椅子に腰かけて煙草をのみだしてくれるのが、どうもその場にふさわしいことのように思われるのだった。

この冬最初の火は勢いのいい音を立て、私の書き損じた原稿や、もう不要になったノート類を燃やしている。空氣窓の細目にあけたところから鉄の火掻棒を入れて、冬ごとずっとやってきた同じ手つきで、掻きまわすと、火の粉は煙突に吸い込まれて、丸いストーブの鉄板が薄赤くなる。私は少し椅子を遠ざける。

外套を着たまんまこの部屋に入ってきた友だちは、その外套を脱いで椅子の背中にかけようとするので、私はそれを玄関の帽子かけへ持って行きながら、お酒飲みたいんだろぅねと言うと、このうちにはそんなものないのを知ってるよと言われてしまう。それで私は戸棚から、いつも山で使うガソリン・コンロを出してともかく湯をわかす用意をする。

彼は多分、私が、そのコンロから青い勢いのいい火を立たせるためにマッチを擦ったりするのを見ながら、三十年近くも前に私を訪ねると、やっぱりこんなことをしたと古い日を考えたろう。そのころでは珍らしい石油コンロを私は部屋に持っていて、彼と二人で冬の夜更に、フライパンで肉を焼いたり、台所から冷えた飯を持って来てバタでいためたりしたことを、まさか彼も忘れてしまいはしないだろう。

人間は三十年近くにもなればすっかり変ってしまう方があたりまえなのだ。だから実際にはこうしてストーブの向う側には私の友だちはいない。だがいないからこそ私はこうして親しい友をそこへ腰かけさせて、ストーブの上にパンを並べて焼きながらお茶を飲むことを想像してみられる。

彼がもし私の書棚を見たら、昔ながらのジイドやヘッセを見つかるだろうし、別の棚に並べてあるスケッチ・ブックを手あたり次第に引っ張り出して、ちっともうまくならないね、若いころ

の方がよかったんじゃないかと淋しいことを平気で言うだろう。

全くそのとおりなのだ。それがずっと親しくしていた友だちの感じ方なのだ。それに私も彼に言うだろう。別にうまくならうとも思わないしね。

それから彼は私の机の上を見る。私はさっき玄関の扉を叩く音がするまで、少年少女が読むボンゼルス『みつばちマーヤの冒険』を読んでいた。七本しか脚を持っていないメクラグモが蜜蜂に言ったことを確かめたいと思って、その辺から読みだしていたところだった。

それを友だちはのぞいてみて、この男はなんという進歩のない奴なのだろうと思うだろうか。

私はそれがよいことだと自分で納得するなら、進歩も変化も尊んでいるのだが、結局は同じところに舞い戻っては同じような事柄について考えこんでいるのである。私は旧友の彼に訊ねてみたいことがたくさんある。君ね、ぼくの仕事、時々は見えてくれているね？ おもしろいと思ったことあるかい？ それとも中学校のころの作文と変らないかい？

そうすると彼はそれについて雄弁には喋らないだろう。彼は自分で考えてもみないようなことはけっして口にしらない人間だし、私を上げますために言葉をさがすようなこともしない。だから私もそんな愚かなことは訊ねない。

私のストープであたたまり、もうこれ以上いても仕方がないと思った時に彼はまた外套を着て

帰ってゆくだろう。私も道がひどいよといって送ったりはしないだろう。

まだ薪や石炭を入れるほどの寒さではない。ストーブはそのまま消える。

冬になってこのストーブに火を入れると旧い友だちのことを考える。その足音をもとめる。黙って部屋へ入ってきたって私は驚きはしないのに、彼らは何をしているのだろう。自分自分の部屋で火にあたりながら同じようなことを考えているのだろうか。

土曜日の雪

戦争の時のやむをえない事情があつてのこととはいえ、かつて雪の深い土地に移り住んで、そこに一年半ほどの生活をしたことがある私は、今から思えば、それを貴重な経験だつたと思つてゐる。だって、何も事件がないのに、急に思い立つて都会に住みなれた私どもが、家を処分して全く知らない土地へ移るということはまず考えられない。戦争のおかげだなどという言葉は決して使うまいが、戦争が原因でこういう結果が私の生活に生じたのも事実である。

それまでも、もう山好きになつていた私は、何やかやといつて一年のうち、雪の中での生活を何十日も経験はしていたけれど、それは雪国の、ひと冬のずっと雪に埋もれた寝起きをしてみれば、生活といつても全く意味がちがってくる。自分ひとりの、勝手なといえば勝手な雪山の生活に比べると、焚木も食糧も心配しながら雪の中で何とかこごえないように生きてゆくのは決して容易なことではなかつた。

去年も会津の山をひとり歩いてゐる時に、その地方に最初の吹雪がやってきて、私自身は、これはうまいところに出合ったものだと思ふのは悦んだのだが、小さい村を通り過ぎる時に、一軒の家の中から老人がその吹雪を見て、つらそうなあきらめの表情を浮かべていたのをこっちが見ると、自分がこの冬をはたしてどんな工合に過ぎているかという自信もなく、不安な気分で見つめた。分て子供たちとその冬最初の雪を眺めた遠い日のことを想い出さずにはいられなかった。

戸をあけて外へ出ても、二日も三日も降り続いた雪が、道も畑も区別なく埋めてしまつて、どこをどう歩いて行つたらいいのか分らなくなるような、そんな大雪はひと冬に三度か四度のことではあるにしても、すっかりと新聞紙で目ばりをした窓をあけることのできない日がひと月ふた月となると、雪の重さが自分の心に感じられてくるようになる。屋根の雪は、仮りに建てた家の襖や障子をおさえつけてあかなくしてしまうのだった。

私は今はまた、生まれた東京に戻つて、都心から離れて、寒い風がよく吹くといつても滅多に雪の降らない土地で、冬の景色を眺めながら、冬の心を考えたり、日なたに椅子を持ち出して、届いたその日の郵便物の紐を解いたりしてゐる。

最近はどうだぞうということもなくなったが、東京の街に大雪が降つて電車がとまり、自動車が方々に立往生している風景を、どういふことなのか懐しく思い出すことがある。それは私を、

子供のころの街の冬に否応なしに連れ戻してくれる。

東京の街には急な坂が方々にあって、九段などには普段でも荷車のあと押しをして金をもらっている立ちんぼうがいたのをおぼえているが、雪が降りだすと大部分の人々は遠方まで歩くのをやめて街がほんとうにひっそりしてしまふ。そんな時に、荷車などを引くものもない。ただチェンをつけた自動車が、いかにも得意げにその威力を見せて道を走るが、それも急な坂にくるともう威力が発揮できなくなつて、坂の途中でとまったままになり、雪をかぶつた、あわれというより滑稽な姿を翌日見せてくれる。私どもは学校へ行く途中にそんな自動車がとまっていると、友だちと指さしあつて大笑いをした。

これは多分私のいい加減な記憶なのだろうけれど、東京には土曜日によく雪が降つたように思えて仕方がない。土曜日の午前の授業を教室で受けていると、窓ぎわの方の誰かが雪だ雪だと小さい声で言う。

雪は花びらのようにグレーの空から落ちはじめる。先生たちは今よりはずっと厳しくて、そんな時に窓から外を見ることなどはけつして許しはしない。話をやめてじっと生徒たちの方を見ているのは、誰と誰とが外を見たということをやちゃんとおぼえていて、操行点を引いてやろうと思つてゐるのだ。私たちはそういうことで別に憤慨もしなかつた。授業時間中は先生と黒板を見て

いなければならぬことを承知していたからだ。しかし私たちは最後の鐘が鳴り、玄関に立っているフランス人の校長先生に、帽子をとってオー・ルヴォワル・ムッシューといってから雪の中へ飛び出すのだった。そうしてもううっすらと積った雪の上へ小さい足あとをいっぱいつけて家に帰った。そのころには雪の降り方ははげしくなつて、私は翌日の日曜日と積る雪とで胸をはずませた。その雪で何をするということも考えなかったが、休みの日に世界が雪で飾られることだけで実に贅沢な気分になれるのだった。

もっと幼いころには、炭を紐の先につけて、雪釣りをした。湿りの多い都会の雪の中から生まれたこの単純な遊びを私はそういつまでもやっているわけにはいかない。雪だるまをつくる年齢もそろそろ過ぎようとしている。しかし積った雪では何かをしたかった。学校で習っているフランス語の本には、ボノム・ドゥ・ネージュと書いてあって、私たちがつくった大きな球の上にそれより少し小さい球をのせるのとはちがい、白いマントを着た恰好のもので、頭にシクルハットをかぶった雪人形の絵がついていた。それでも、それはフランスの雪だるまであつて、誰もそんな絵のようなものをつくってみようとはしなかった。

火鉢を入れてくれた自分の部屋に落ち着いて、窓から降り続く雪を見てみると、木の枝が雪の重みでしなないはじめて、普段はあまりよく見えない遠くの建物がよく見える。三宅坂の衛戍病院

の窓がずらっと見えるようになる。

私は窓から見える、いつもとちがった景色を描くことにした。誕生日に買ってもらったワットマンに鉛筆で構図をきめ、手を火鉢で時々あたためながら、パレットにニュートンの絵具をしぼり出す。考えてみるとこうして一枚の水彩画を描くにしても、少年のころの私は、今よりは余程専門家だった。絵具が乏しくなると、神田の文房堂まで行って、ニュートンのカドミウム・オレンジをくださいなどと言えたのだ。

私は雪景色に色をつけた。寒い冷たい景色を描いていながら、雪以外の部分がどうしても暖かいものを感じられだして、生意気なことのようにだったが、暖かい色を方々に使った。空は灰色よりも紫を帯びて見えた。私がそういうふうに見たのかもしれない。そして蜜柑の山に雪が積ったような絵ができてきた。それはその日の日暮までにはできあがらなかった。いつ仕上げたかはおぼえていないが、しんとした土曜日の午後、雪の絵を描いていると、いつもは聞こえない、船の汽笛の音がしきりにしていた。雪が降ると遠くの音がよく聞こえた。